

## スラム街からケニア代表選手が誕生した理由

ケニアの首都ナイロビにはマサレという巨大なスラム街があります。貧困と不衛生な環境のなかで、エイズや結核が蔓延しています。そんな場所で、1987年からサッカーとコミュニティの清掃活動を通じて若者たちの社会参加を促す活動が行われています。子どもたちをひきつけるスポーツにさまざまな教育プログラムを組み合わせることで、都市再生に結び付けようという試みです。このマサレ青少年スポーツ協会(MYSA)は、ごく小さな自助組織として生まれましたが、今では多くの支部や男女のプロサッカーチームを持つ大きな組織に発達し、ケニア代表選手や政治家さえ輩出しています。彼らの活動は国際的にも評価され、2003年と2004年にはノーベル平和賞候補にもノミネートされました。

## 研究テーマは「スポーツと都市再生」

私のそもそもの研究テーマは、スポーツと都市再生です。テーマにはプロスポーツやオリンピックなどの「見るスポーツ」とマクロな意味での都市の社会・経済との関係もあれば、もっとミクロな日々の活動としての「参加するスポーツ」と都市のなかの特定のコミュニティとの関係も含まれます。私の主な関心は後者ですが、前者との関わりも無視できません。

私が博士課程のときに留学していたイギリスの諸都市でもそのなかに相対的に貧しい地区

# 「楽しげ」なことが地域課題を解決する イギリスの都市から途上国開発、 そして日本の限界集落へ



が必ずあり、重要な政策課題になっています。そうした地域では、若者の失業率が高く、学校教育の質も低くなりがちです。教育や雇用の機会から排除されると、余暇の機会も大きく制限されます。その結果、有り余る時間に飲酒やドラッグ、そしてケンカをして過ごすことが数少ない娯楽になってしまいます。もちろんすべての子どもたちがこうした「悪さ」をしたいわけではないのですが、そうした環境に育つ限りそれがごくフツウの過ごし方になってしまう。そこで彼らにサッカー教室など質の高い余暇機会を提供することを通じて、非行から遠ざけて成長をサポートしようという住民団体が多く存在します。これらの地域では親が失業や業物依存症などの問題を抱えている割合が高く、こうした団体を運営する住民たちが若者たちのいわば親代わりになるわけです。もちろんすべての団体がうまく運営できているわけではありません。うまくいっているところとうま

くっていないところとの差はどこにあるのか——これが今に到る研究の出発点です。

## 「スポーツによる開発」が 広がるアフリカ

### 「楽しげ」に

### 限界集落を再生する日本

現在の関心は、二つの方向に広がっています。一つは、冒頭のMYSAのようにスポーツを通じたコミュニティ再生の研究を国際協力、途上国開発の分野に広げています。たとえば、アフリカ諸国ではエイズの蔓延をどう食い止めるかが大きな課題ですが、単にエイズ教育や検診を行うだけではなかなか人が集まりません。そこで、サッカー大会などのイベントとセットで行うことで検診や教育プログラムの参加者を増やすことができます。エイズ防止に限らず、スポーツをきっかけとして、そこからさまざまな社会開発のプログラムを展開していく取り組みが急速に増えています。こうした運動の広がりを実態について、今追いかけているところです。

もう一つは、日本の地域課題に対して、スポーツに限定せずに「楽しさ」の要素を活かして取り組んでいる活動の研究です。日本の都市や地域の問題を見渡したとき、「限界集落」という現象が重要な政策課題の一つです。都市化と少子高齢化によって農村が縮んでいくという現象です。これを根本的に解決することは難しいですが、そのなかでもなんとか生き延びようとしている集落の人々の活動を調査しています。

私が対象としている地域では、60代70代の方々が放棄棚田をイベント広場として再生して、住民主体のイベントを中心に地域おこしを

目指しています。活動はすべてボランティアなので苦勞も多いようですが、それでも口々に「楽しい」と言っています。

これからの発展を望むというより、否応なしに縮小していかなければならない地域でも、「楽しさ」を入り口に充実した生活を維持していくことができる。このことは大事ななだと思います。これから先、こうした「楽しげ」な活動が実際にどういう意味で地域の「再生」につながっていくことができるのか。見守っていきたいと思います。

## 社会的に

### 「排除」された人々をいかに「包摂」するか

このように、そもそもの研究テーマは「スポーツと都市再生」ですが、スポーツに含まれる「楽しさ」という要素はほかの余暇活動にも広げて考えることができますし、課題解決も都市の問題に限る必要はないと思っています。こちら側にいろいろと「楽しげ」なものがあり、あちら側に「社会問題」がある。その両者の掛け算で問題を解決しようとする取り組みは、いたるところにあるのです。たとえば今ソーシャルビジネスと呼ばれるような活動は、多くがそういう仕組みを利用していていると思います。

私の留学当時のイギリスで社会政策上最も重要なキーワードが、ソーシャル・エクスクルー



ジョンとソーシャル・インクルージョンでした。日本語では社会的排除と社会的包摂といいますが、都市における貧困はいろいろな問題が重層的に都市内の特定の地域に集積してしまふことによつて起こります。つまり、地域ごと社会の主流から取り残されてしまふ。それを、社会と接続することで解決しようという考え方です。

スポーツ参加は一つの社会参加の形なので、それだけで社会に接続されたと考えることもできます。しかし、そこで終わってしまうと本当の課題解決にはなりません。いかに経済的なシステムに接続できるか、あるいはその手助けができるか、という視点は重要です。先に紹介したMYSAやイギリスの住民団体が成功しているところは、こうした点に自覚的です。サッカーを楽しみに来た子どもたちが大人になつていく過程で、どんな選択肢を提示できるか。その点をよく考え、プログラムのなかに職業トレーニングを組み入れていたりします。いわば、社会へのはしご

や階段をつくる作業です。ケニアのMYSAは、子どもたちに民主的に意思決定させる仕組みを内包させて社会との接続を行っていますし、奨学金制度や、図書館の建設なども行っています。フォーマルな制度がほとんど整っていない地域では、スポーツ組織がその代替となり、社会と接続する数少ない機会となり得ます。

## 社会と接続する仕組みづくりには醍醐味がある

よく「スポーツを通じた青少年の育成」といわれますが、個人の人格形成やスキル開発だけでは社会的包摂にはなりません。社会の構造の方を変えることにこそ、スポーツが利用可能なのだと多くの方に知っていただきたいと思っています。日本の場合には、有名なアスリートが増えましたが、そこでとどまってしまうのもつたない気がします。恒常的な構造変革の仕組みをつくることにこそ、スポーツを使った社会的包摂の醍醐味があるのです。

私は、小さい頃から両親の影響でスポーツを見るのもやるのも好きでした。大学で勉強するときもスポーツを入り口にして学問の世界に入ることができた。スポーツのおかげで社会に接続してもらったことができた。でも実は妻が大のスポーツ嫌いなんです。スポーツができなければダメだと言ってしまうと、大問題になる(笑)。おかげでスポーツに限らず、自分自身を動かしている原動力があることが大事なのだ気がついたので、それで「楽しげ」なことというテーマに辿り着いたというわけです。(談)

社会学研究科講師

鈴木直文

(すずき・なおふみ)

1999年3月東京大学文学部行動文化学科社会学専修課程卒業、2001年3月東京大学大学院工学系研究科社会基盤工学専攻修士課程修了。2007年11月University of Glasgow, Department of Urban Studies, Ph. D. 取得。2007年4月～2010年3月東京大学大学院工学系研究科社会基盤工学専攻マネジメントグループ助教。2010年4月一橋大学社会学研究科講師。